



やりたいことをやると決めた。「失業を報告しながら、『わくわくする』なんて言う人、なかなかない」と、照幸さんに魅かれた理由を衣里子さんは語った。照幸さんは心中にずっとあった「宿をやりたい」という思いを実現し、ゲストハウスを経営すると決意した。バックパッカーとして世界の田舎も旅した経験から外国人に日本のおいしい田舎を発信し、紹介したいと考え、日本の田舎を巡った。ゲストハウスの経営だけで生活するのも無理と考え、並行して就職活動も始めた。新天地を求めてたどり着いたのは綾部市の上林だった。あやべ温泉で就職が決まり、「家はないけど、仕事があるから何とかなるだろうと、体一つで移住してきた」と当時を振り返る。

結婚。「結婚式はまだなんです。いつか地域の人がふらっと来られるような結婚式をしたい」と微笑み合う。まだ子どもはいない二人だが、「早く生んで」と隣のおばあちゃんに期待されている。「いろんなことを経験してきたけれど、子育ては未経験。だからやつてみたいことの一つです」と将来の家族を思い描く。

## 秘密

### ちょっと足をのばせば行ける

綾部の魅力について、「人の温かさ」だと二人は語る。田舎は、閉塞感があるイメージだが、実はとてもオープン。誰かが家に遊びに来たら、「ちょっと寄って行きなさいな」ともてなす心が自然に備わっている。自然のまま、伝統的な日本の暮らしぶりがある。「綾部に来てからできることも増えた。家の改修、棚作り、米作り…。生活するために必要なことは、何でも自分でやってみようと思わせ生活するためには、何でも自分でやってみようと思わせ

「田舎の暮らしは結構忙しいが、自分が行ったこともない国の人があやってきて、地元の人とわいわいやっている姿を見るのが楽しい」。地元の人々は、外国人がいい割合で暮らせる楽しい地域を目指し、今後は団体客の受け入れや旅行業も考えていると。全国にある地方の宿を増やすことも目標で、「地方を巡るツアーや旅行がメジャーになればいいなと思う。宿と $\alpha$ があれば、生きていけることが実証できれば、田舎に帰つて来る人が増ええる。仕事は生み出せる」と力を入れる。「地域の人と触れ合うスタッフの宿、地域のつながりを作っていく」と、夫婦二人の思いを語った。地域の人にとって、きっと楽しいものになるに違いない。

「夢は見ない主義」の照幸さん。「自分がやりたいと思った段階で自分自身に変わることから積み上げていく」と自身の信条を語った。

## 私たちの人生年表 -



今まで大切にしてきたことは？

- ・可能性を信じる。
  - ・広く情報と知識をえること
  - ・目標達成への強い思いと合理的・効率的手段を考えること

**Q** 今できることは?

---

- ・人生を楽しむこと、それを伝えること。
- ・ネットや自身のスキルで地域（集落）が持っている問題を解決すること。



綾部でゲストハウスクチュールを営む照幸さんと衣里子さんは、ともに大阪生まれの大坂育ち。照幸さんは、世界を一周した経験を持つ。志望大学に進学できず、高校卒業後、単身アメリカへ渡った。続けてフランスにも留学し、それぞの周辺を旅したのが世界一周目。24歳のときバックパッカーとして、二周目の旅へ。そのときよく利用したのがゲストハウスで、「宿をやりたい」という思いが芽生えたのもその頃だという。26歳で帰国し、ホテル勤務などを経て、旅行会社へ就職する。一方、衣里子さんはこれまでのほとんどを大阪で過ごし、システムエンジニアとして8年間、企業勤めをしていた。照幸さんが37歳の時、社会人が通える経営大学院で衣里子さんと出会った。4月に出会い、5月にはお付き合いを始めた二人。しかし、6月のある金曜日、二人の人生を変える出来事が起こった。照幸さんがいつものように退社していた旅行会社がいきなり倒産したのである。職を失つたにもかかわらず、照幸さんは「これはチャンスだ」と前向きに捉え、自分の